

ガーナ旅行詳報( 2004 年 6 月 19 日 ~ 29 日 )

この詳報は、同行できなかったワイフに報告するつもりで纏めたもの。  
従って通常の小生の報告に比べれば、若干細かすぎると思う。しかし  
彼女からは、この報告で小生の行動が良く分かったとの評価を受けた。

成田よりアクラへ

6 月 19 日 成田発 アムステルダム着

6 月 20 日 アムステルダム発 アクラ着

\* 途中エンジントラブルとかでローマ空港に立ち寄り、2 時間ほど遅れてアクラ着。

6 月 21 日( 月 )

\* 運転手のフレッドが、まず大使館・料理人の木原さんと一緒に魚市場に、そして彼一人で巨大マーケットに案内してくれた。

\* 次いでエンクルマのメンター?、DeBois の記念館に案内された。  
彼は、ハーバードで PhD を取得した最初のブラックアフリカン。  
エンクルマのペンシルバニア大学院留学当時の教授。  
エンクルマが大統領になった後、ガーナに招かれ、アクラで死去。  
統一共産アフリカ樹立を夢見ていた模様。

\* 運転手フレッドの話:

アメリカがアメリカ方式を唯一の方式として主張し、エンクルマ達の考えた他の方式を認めようとしなないのはおかしい。(しかり)

\* フレッドはエウエ族で、アシャンティ語と全く異なるエウエ語を話す。  
ガーナの共通語は第一に英語、次いでアシャンティ語。

6 月 22 日( 火 )

\* 今日から 3 日間、浅井さんに紹介された日本人会会長・田村さんのガイドでクマシ、ケープコースト、エルミナ方面を視察する予定。

\* 先ずアシャンティ時代の建築物と称する小さな建物を見学した。  
本物か? 田村さんも疑心暗鬼。

\* その後、イモを原料とするフフと称する餅を鶏のシチュウと一緒に食べた。  
あまり美味しくない。

\* Institute of Cocoa Research 見学

ガーナは、ココア生産量世界第二( 50 万トン )。品質は世界第一とのこと。  
生産量世界一はコートジボアール( 130 万トン )。

高品質を支えているのが、この研究所。ガーナ政府としてかなり力を入れている感じ。

2003 年開催の World Conference of Cocoa もここで開催された。

ココア生産性向上、品質改良、高付加価値化等に努めている。

\* ココア農園の中で虫に刺された。田村さんによると、発熱したらすぐに都立駒込病院の専門医に云って、飲み薬をもらい、飲めば問題なしとのこと。

6月23日(水)

\* 田村さんの突然の発案で、サバンナを見学に行くことになった。

キンタンポを越えてヴォルタダム近くまで行った。ここまで行くと道も良くなったが、そこに行くまでの道路はガタガタ道。日本の建設会社K社が請け負った道路工事とかで、田村さんはK社の工事に批判的。曰く、韓国の業者に丸投げだった、曰く完工式に韓国の大使は出席したのに、日本の大使は出席しなかった、等々。

\* 至る所で山羊を見かけたが、犬猫はほとんど見かけなかった。山羊は小型だが、孕んだ山羊が多かった。山羊は食用とのこと。

\* また大きい蟻塚とか、サバンナに多い丸い土の家も見かけた。男の子は割礼はされてないようだった。

\* 当初オブワシの金鉱に行くことになっていたが、サバンナドライブで

( 往復4—500km )時間を取り、金鉱見学は明日( 6月23日 )ということになり、オブワシに泊まる。元金鉱のゲストハウスだった所で、施設としては悪くないところだった。

但し疲れていたのので体に馴染むモノと言うことで、メニューにあった

タイヌードルなる物を注文したところ、出てきたのは油の酸化したインスタントラーメンが出てきたのにはビックリ。

6月24日(木)

\* 朝食後、金鉱訪問。

\* 訪問した Ashanti Gold Mining は世界有数の金の生産会社で、地下の施設を見学させてもらった。ダイナマイトを仕掛けるための穴を水圧掘削機で開けさせてもらった。

- \* 現在地底最深部 1000 メートル位の所を掘っているらしい。
- \* 地底の訓練施設で、明かりを全く消したときには、周りに人がいるとは分か  
っていても、大変な恐怖を感じた。
- \* この金鉱では、金鉱の種類毎に新しい精錬法を開発し、生産性が大幅に向  
上したとのこと。
- \* ここでは最後疲労困憊、若干フラフラ気味、側にいた若いスタッフが、さり  
げなく地表まで手を引いてくれた。優しい人々。深謝。
- \* 地表に出たところで、転がっている石ころを拾い上げたところ、ガードマン  
が、それをやると逮捕されることがあると云った。どうも冗談ではないよう  
だった。
- \* この金鉱見学は、ココア研究所、奴隷積み出し施設、野口英世記念館、ガー  
ナ独立記念施設などと並んでガーナ見学の大きな目玉。
- \* 金鉱見学後、シャワーを浴びて、悪路をぼろのランドクルーザーでエルミナ  
に向かう。途中で右手のモノを掴む力が低下しているのに気づく。
- \* エルミナ砦見学。アメリカ系黒人らしいグループと一緒にになった。彼等の心  
境はどんなだろう。自分達の祖先が奴隷としてここから積み出されたのか  
も知れない、と考えると平静ではいられないのではないか。
- \* 奴隷の積み出し施設であった砦の最上階は、総督の居住区、その下が士官  
居住区、更にその下が兵隊達の居住区、そして一番下の窓もない暗い部屋  
が、奴隷の繋がれていたスペース。
- \* 士官達は、そのテラスから女奴隷を品定めし、夜伽の相手を選んでいたら  
しい。云うことを聞かない女奴隷にはひどい仕打ちをしたらしい。日本が中  
国、朝鮮でやったと云われる慰安婦問題と五十歩百歩。
- \* 中庭の真ん中に教会。このエルミナの砦は、最初ポルトガルが建て、その後  
オランダが奪取、最後イギリスのモノになったこともあって、この教会も尖塔  
に十字架のついたカトリック型から屋根のフラットなプロテスタント型に変わ  
ったりしている由。
- \* ここには神父、牧師がいたのだろう。  
彼等は、自分の周りで行われる白人達と奴隷の関係を、どの様に見ていた  
のだろうか。今から考えれば、ここもキリスト教の歴史の中での恥部の一つ  
であるに違いない。
- \* ただそうしたことへの反省などから、1802 年のデンマーク、1808 年のイギ

- リス、アメリカの奴隷取引禁止が実行されたのかも知れない。
- \* エルミナ見学の後、ケープコースト見学。日が陰りだしていたのでここは外から覗いただけで済ませた。
  - \* ゴールドコーストには、オランダ、イギリス、スウェーデン、デンマークなどにより、一時 25 の砦が作られた由。
  - \* 当時の植民地拡大の動きは、丁度最近のグローバリゼーションの動きにのって経済進出するアメリカ、日本、中国、韓国などの動きと同じことかも知れない。こちらがやらなければやられると云う式に。  
奴隷売買、植民地は時代の流れであった、やった連中だけが悪いわけではなかった。やらなかった連中だって、事情が許せばやっていたかも知れない、という事柄だったのではないか。  
イギリスからの留学生だったジェフが、イギリスの植民地に何の後ろめたさを感じていないように。またフランスからの留学生、ピーターが、フランスが植民地拡張を進めなければ、あの連中は依然未開のままにいるぜ、と嘯っていたように。
  - \* ケープコーストからは、真っ暗な夜道を、悪路もモノともせずアクラ目指して全速力で帰ってきた。暗闇の中から、突然真っ黒な人間がヘッドライトの明かりの中に飛び出してきて、自動車のすぐ脇を飛び去って行く様は、何とも脅威だった。
  - \* 大使館で久しぶりに、食事らしい食事にありついた。ただ右手が麻痺して箸は使えず、日本食をフォークでどうにか食べた。
  - \* 浅井さんが心配して馬場医務官を呼んでくれた。彼の診断では血圧が上 190 近くあり、安静が必要とのこと。帰国も慎重に考えなければならぬとのこと。26 日買い物に行くのは止めて欲しいとの診断。念のため持参していた薬をチェックしたところ、全てがギリギリで、成田に着くときには残量ゼロになることが判明した。  
一~二時間して再度血圧をチェックしたところ、150 位に落ち着いており、馬場医師としても、帰国は大丈夫でしょう、但し血圧が変動するようなことは極力避けること、帰国後は直ちに主治医に診てもらうこと、少な目の薬を帰国後直ちに服用すること、等の条件が付けられた。

6月25日(金)

- \* 朝起きたら右手の麻痺は昨日に比べ、良くなっていた。夕刻馬場医師が

再度診察してくれた。全体に落ち着いているとのこと。帰国は問題なし。

- \* 夕方防衛庁から出向の久保田さんが帰国するため、送別会あり。小生も出席。
- \* 北海道出身の山内さん、スウォースモア出身。奥さんはアメリカ・ビュート出身の女性。
- \* 体のことを考えて早めに送別会を退席。
- \* 馬場医務官は休暇のためイタリーに向け出発。彼長崎大学からの派遣医師で、熊本大学にいた清さんのこと良く知っていた。
- \* 浅井さんが無理に馬場さんに診せてくれたお陰で、小生も状況が分かり、帰国までの間比較的安心することが出来た。馬場さんと、取り分け無理にでも馬場さんに診せるよう取りはからってくれた浅井さんに多謝。
- \* 浅井さんは大変優秀。肝っ玉母さんの的で、細かいことに拘泥せず、何事もポイントを押さえて判断し、実行している様子。スマイル会で見せていたキャラクターは、彼女本来のモノらしい。大使館の部下達の統率もしっかりやっている様子。田村さんによると、今までの大使の中では一番とのこと。小生も同感。この人は、能力、性格から云って政治家向きではないか。彼女実務家的で、アウトゴーイング。本人ももう少し若ければその気持ちあるのではないか。日本人として得難いタレント。
- \* 司法研修所時代の仲間が彼女を外務省に推薦したらしい。
- \* 彼女の父親は代議士をしていた由。彼の甥は前防衛庁長官。ご主人は大資産家の息子らしい。彼等の子供は我が家と同様女、女、男とのこと。

6月26日(土)

- \* 馬場医師からは止められていたが、お土産を買いに浅井さんと市場に行った。値下げ交渉をすると血圧が上がるので、相手が15万セディと言えば、当方は5万と言って、相手が何と云おうと5万と言い続ける。そうやって民芸品を二つ、それぞれ5万で買った。気を使わないで楽しい買い物が出来た。交渉は腹をくくった方が勝ちという訳か。(所で5万セディとは約500円のこと)。あと金属製の人形2体を8万で購入。ガーナのチョコレートは純度が高く、健康にも良いとのことなので、皆へのお土産はチョコレートにした(30枚)。
- \* 桂子に電話をかけ、空港に薬を持ってきてもらいたい、慈恵柏の予約をとって欲しい、等依頼した。

- \* 後は荷造り。なくなったと思っていた帽子、浅井さんから借りていた腕時計などが出てきた。何となくホッとする。

6月27日(日)

- \* 一日のんびりと過ごし、夕方中華料理屋へ。その後空港へ。大使はすごい、ほとんど顔パス。
  - \* She is Japanese Ambassador! と周りの人々が囁いているのが聞こえた。
  - \* アクラに来た時同様、乗客が手に余るほどの荷物を機内に持ち込むので、皆が乗り込むのに大変な時間がかかる。終戦直後の日本で汽車に乗り込むのと似ているところがある。
  - \* 機内にはいると、昔の百円札百枚の一万円札束のような札束を数個持っている乗客がいた。考えてみると、大した金額ではないのだが、札束のボリュームに慣れるのが大変。
- ガーナに来たときと同様、飛行機に乗り込むのに長い時間がかかった。

6月27日(日) アクラ発 アムステルダム経由 成田向け

- \* アムステルダムでのトランジットのための時間が何とも長かった。

6月29日(火) 6月28日にアムステルダムを発って無事成田着。

空港で桂子に会いホッとした。

総評： 今回のガーナ旅行は、植民地にされた側から観察することが出来たように思う。同時に植民地拡大に回った側の事情も感じる事が出来たようでもある。全体として新鮮で、大変有意義な旅行だった。

しかしなかなかハードで、スリリングな旅でもあった。

日本人が是非訪れるべき土地。

日本人の知らないところで、欧米人が何をやったかを知るのは、絶対に日本人に必要な歴史教育である。色々な視点から世界を見ることは、ナイーブな日本人を教化する上で不可欠な教育である。

また幕末の日本人が、当時欧米列強のやり口を知って彼等と対応していたことは

改めて驚き。大変限られた情報源を考えると尚更。( 泉三郎著 “堂々たる日本人”  
佐藤雅美著 “開国”等参照 )

ただ現在の日本人をこの地に誘うためには、動機付けなどの面でそれなりの工夫  
が必要。

駐日ガーナ大使館を中心に、日本におけるガーナ・プロモーション計画を企画する  
必要がある。官僚の行動様式から考えると、その実現にはガーナ本国政府の駐日  
大使館への指示・支持が不可欠。

以上